

**研究拠点形成事業  
平成26年度 実施計画書**

A. 先端拠点形成型

**1. 拠点機関**

日本側拠点機関：	京都大学野生動物研究センター
(マレーシア) 拠点機関：	マレーシア・サバ大学
(ブラジル) 拠点機関：	国立アマゾン研究所
(インド) 拠点機関：	インド科学大学

**2. 研究交流課題名**

(和文)： 大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全研究

(交流分野： 生物学、生態・環境、基礎生物学)

(英文)： Conservation research of tropical biodiversity centering on large animal studies

(交流分野： Biology, ecology , environment, Basic biology)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/core-to-core/>

**3. 採用期間**

平成 24 年 4 月 1 日 ～ 平成 29 年 3 月 31 日

( 3 年度目)

**4. 実施体制**

**日本側実施組織**

拠点機関：京都大学野生動物研究センター

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：野生動物研究センター・センター長、幸島司郎

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：野生動物研究センター・センター長、幸島司郎

協力機関：京都大学霊長類研究所

事務組織：京都大学研究国際部研究推進課、野生動物研究センター事務室

**相手国側実施組織**（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名：マレーシア (Malaysia)

拠点機関：(英文) University Malaysia Sabah

(和文) マレーシア・サバ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文) Institute for Tropical Biology and

Conservation, Director and Associate professor, Abdul Hamid AHMAD

協力機関：(英文) Sabah Foundation

(和文) ヤヤサンサバ財団

協力機関：(英文) Malaysia Science University

(和文) マレーシア科学大学

協力機関：(英文) Plau Banding Foundation

(和文) プラウバンディング財団

協力機関：(英文) Orang Utan Island Foundation

(和文) オランウータン島財団

経費負担区分 (A型) : type 2

(2) 国名 : ブラジル (Brazil)

拠点機関：(英文) National Institute for Amazonian Research

(和文) 国立アマゾン研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Laboratory for Aquatic Mammal Study,

Professor, Vera Maria Ferreira DA SILVA

協力機関：(英文) ありません

(和文)

経費負担区分 (A型) : type 2

(3) 国名 : インド

拠点機関：(英文) Indian Institute of Science

(和文) インド科学大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Center for Ecological Sciences,

Chairman and Professor, Raman SUKUMAR

協力機関：(英文) ありません

(和文)

経費負担区分 (A型) : type 2

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

ボルネオやアマゾンの熱帯雨林など、熱帯生物多様性の重要なホットスポットを有するマレーシア、ブラジル、インドの3国は、いずれも経済的・歴史的に日本と関わりが深いばかりでなく、近年の著しい経済発展と開発のため、生物多様性の保全が緊急の課題となっている点、自力での多様性保全の機運が高まっている点で共通している。熱帯生態系の多様性保全には、ゾウやトラ、オランウータン、イルカ、ワシなど、大型動物の研究と保全が重要な意味を持つ。これらの多くは、その種を守る事が他の多くの生物や環境を守る事につながるアンブレラ種であると同時に、森林伐採などに代わって地域経済に貢献可能なエコツーリズムで、その生態系のシンボルとして重要となるフラッグシップ種だからであ

る。しかし熱帯諸国では、まだ研究者が少なく、熱帯諸国間の研究者交流も希薄である。京都大学野生動物研究センターと霊長類研究所は、これまでこれら3国でオランウータンやイルカなど多様な野生動物の行動・生態研究で大きな国際的成果をあげてきた。本計画は、これまでの交流実績をもとに、日本と相手国研究者、特に若手研究者や大学院生が対等な関係で、1) 日本が得意とする先端研究技術を駆使した大型動物の行動・生態・保全に関する共同研究、2) 野生動物の研究・教育・保全はもちろん、COP10名古屋プロトコルの実現に向けたエコツーリズムによる地元の経済活性化と環境保全にも貢献できる自然生息地に直結した「理想の動物園・水族館」の整備。3) 日本が仲立ちとなった熱帯諸国間の研究者交流と共同研究を推進することによって、熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークを構築することを目標としている。成長著しい生物資源大国であるこれら3国と日本が対等な関係で研究交流することで、生物多様性保全に関するユニークな国際貢献を果たしたい。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

前年度までの共同研究を継続・発展させるために、25年度も、マレーシアのボルネオ島では、マレーシア・サバ大学と連携して、ダナムバレーやセピロクの自然保護区などで野生オランウータン、バンテン（野生ウシ）、ジャコウネコ類、ヤマアラシ類などに関する共同研究、マレー半島では、マレーシア科学大学、プラウバンディング財団、オランウータン島財団と連携して、ベラム・テメンゴール森林保護区などで、飼育オランウータンの野生復帰事業への協力や、野生マレーバク、コウモリ類、イルカ類などに関する共同研究を行った。ブラジルでは、国立アマゾン研究所と連携して、アマゾンカワイルカやアマゾンマナティー、コビトイルカなど、アマゾン川の水生哺乳類を初めとする各種哺乳類についての共同研究をおこなった。インドでは、インド科学大学と連携し、ゾウや絶滅危惧イヌ科動物であるドール等に関する共同研究を行なった。

相手国におけるこれらの共同研究を進めるために、前年度に引き続き、相手国若手研究者6名（各国から2名ずつ）を日本に招聘し、大型野生動物に関する研究技術の向上を目指した研修と日本の野生動物に関する共同研究を、野生動物研究センターや霊長類研究所の施設、世界自然遺産であり野生動物研究センターが観察施設を持つ屋久島、および連携動物園・水族館の施設などで行った。屋久島での研修および共同研究は、京都大学の大学院生12名を中心とする日本の若手研究者と合同で行ったもので、フィールドワークだけでなく次世代シーケンサーを使ったゲノム解析やLC-MAS/MASなどによる高度化学解析など、先端的な野生動物の研究法を日本と相手国の若手研究者が協力して開発し習得しながら、屋久島の貴重な野生動物研究を進め、その保全に貢献することを目的としている。第2回目となる25年度の研修と共同研究では、野生動物の糞を利用したゲノム解析による食性分析や腸内細菌相解析など、昨年度よりレベルアップした研修と共同研究が可能となった。

これらの研修と共同研究の後、京都大学において第2回目の国際セミナーをおこなった。この国際セミナーには他経費による海外からの参加者も含めて計96名が参加し、これまでの互いの研究内容、日本での共同研究と研修の成果に関する情報を共有するとともに、

今後の共同研究の具体的な進め方などを討議した。また、ゲストスピーカーとして招いたバイオリギングや音声分析、ゲノム分析など先進的研究手法による優れた研究を行っている研究者による講演と討論、その他多くの国内外研究者と学生参加者の発表・討論により、今後の共同研究に有用な情報交換を行なうことができた。この研修と共同研究、国際セミナーは全て英語で行われ、相手国での共同研究や研究レベルの向上に役立つばかりでなく、日本の若手研究者の研究レベル向上と国際化、グローバル人材の育成、世界自然遺産である屋久島をモデルとした野生動物保全と地域社会の持続的発展を両立させる方法の策定にも貢献できると考え、今後も継続・発展させる予定である。この研修・共同研究と屋久島での国際セミナーは、今年度から京都大学大学院理学研究科の正式な教育カリキュラムの一部として、大学院教育に取り入れられた。

また、連携先相手国のもちまわりで毎年 1 回開催するものとして、野生動物保全研究に関する第 2 回目の国際ワークショップをインドのバンガロールにあるインド科学大学において開催した。参加 4 国の研究者が互いの研究内容や共同研究の現状に関する情報を共有することで、今後の共同研究の具体的な進め方などを討議した。その他多くのインド側研究者と学生を含む参加者（計 70 名）の発表・討論により、今後の共同研究に有用な情報交換を行った。多くのインド側研究者や学生の参加は、新たな共同研究を準備し、将来に向けて本事業による熱帯生物多様性保全に関する国際共同研究ネットワークを発展させる契機となると考えられる。

さらに、野生動物の研究・保全はもちろん、エコツーリズムによる地元経済活性化と環境保全にも貢献できる自然生息地型「理想の動物園・水族館」とも言える「フィールドミュージアム」を、まずアマゾンのマナウスに整備するために、京都大学野生動物研究センターと国立アマゾン研究所によって 26 年度から実施が予定されている JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力 (SATREPS) 「“フィールドミュージアム” 構想によるアマゾンの生物多様性保全」事業に協力するため、ブラジル側代表者と絶滅危惧水生哺乳類アマゾンマナティーの飼育施設、半飼育施設、野生個体研究施設の基本設計に必要な共同研究なども行った。

## 7. 平成 26 年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

相手国との共同研究を継続・発展させて、研究協力体制をさらに強化するとともに、熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークを、本事業の相手国であるインド、マレーシア、ブラジルだけでなく、アフリカ諸国にも拡大するために、26 年度の野生動物保全研究に関する第 3 回国際ワークショップを、第三国であるタンザニアのアルーシャにおいて、タンザニア野生動物研究所と連携して開催する。

### <学術的観点>

ゲノム解析、音響解析、画像解析、高度化学解析、バイオリギングなどの先端研究技術を改良・開発し、大型動物の行動・生態・保全に関する共同研究をさらに進める。特に、夜

行生動物など、直接観察が困難な野生動物研究の新たな研究法として、糞から抽出した DNA やホルモンなどの化学成分から、種判別、性判別、食性や植物との相互作用、腸内細菌相、生理状態、味覚などの機能遺伝子多様性解析など、様々な情報を引き出す手法の開発を、相手国若手研究者との共同研究を通じてさらに進める。

#### <若手研究者育成>

相手国において、相手国と日本の若手研究者の共同研究を継続・発展させるとともに、前年度より多くの相手国（7名）と日本（18名）および別経費により招聘国（タンザニア2名）の若手研究者を迎え入れて、研究技術向上を目指した研修と共同研究を、野生動物研究センターや霊長類研究所の施設、屋久島、および連携動物園・水族館の施設などで行なうとともに、京都大学において第3回目の国際セミナーをおこなう。本年度の研修および共同研究では、次世代シーケンサーを使ったゲノム解析や LC/MAS・MAS による高度化学解析など、前年度よりさらにレベルアップした先端的な野生動物研究法を日本と相手国の若手研究者が協力して開発・習得する予定である。これに加えて、各研究課題に必要なゲノム解析、音響解析、バイオロギングなどの先端研究技術習得とデータ解析のために、相手国若手研究者を適宜日本に招聘して研修と共同研究を行う。

#### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

大型野生動物の研究・保全だけでなく地域の経済活性化と環境保全にも貢献できる自然生息地型動物「フィールドミュージアム」を、まずアマゾンのマナウスに整備するために、京都大学野生動物研究センターと国立アマゾン研究所によって26年度から実施が予定されている JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力 (SATREPS) 「“フィールドミュージアム” 構想によるアマゾンの生物多様性保全」事業と連携して、アマゾンマナティーやアマゾンカワイルカや大型魚類、絶滅危惧霊長類、ナマケモノなどの森林大型動物に関する共同研究を進め、アマゾンにおけるフィールドミュージアム整備に協力する。

## 8. 平成26年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成24年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) マレーシアにおける熱帯生物多様性保全 (英文) Conservation of tropical biodiversity in Malaysia				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授 (英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Director and Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・	(英文) Abdul Hamid AHMAD, Institute for Tropical Biology and Conservation, Associate professor				

職		
参加者数	日本側参加者数	15名
	(マレーシア)側参加者数	10名
	( )側参加者数	名
26年度の 研究交流活動 計画	<p>ボルネオとマレー半島で、前年度までの研究成果をふまえて各共同研究を継続し、さらに発展させる。</p> <p>ボルネオ島：拠点機関であるマレーシア・サバ大学と連携して（ハミド、ヘンリーの両教員が対応）、ダナムバレイとセピロクの自然保護区、キナバタンガン流域で、ボルネオ熱帯生態系の野生動物保全研究をおこなう。具体的には、バンテン（野生ウシ）、野生オランウータン、ヤマアラシ、ジャコウネコ、センザンコウ、テングザルが研究対象である。主要な研究メンバーは、幸島司郎、松林尚志、松田一希、半谷吾郎、金森朝子、久世濃子に加えて、大学院生の松川あおい、中林雅、レナータ、ホン・ワンティンである。</p> <p>マレー半島：マレーシア科学大学（シャルール）、プラウバンディング財団熱帯雨林研究所（バスカラン）などと連携して、マレー半島熱帯林の野生動物保全研究をおこなう。飼育オランウータン、マレーバク、コウモリ、イルカ類など。林美里、木村里子、ベルコビッチ、ヒル、大学院生の田和優子が主要な研究者である。</p>	
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>ボルネオ島では、バンテン、オランウータン、ヤマアラシ、ジャコウネコ、センザンコウの生態に関するこれまでの研究成果をふまえて、その保全研究がさらに進み、これらの研究を軸とした熱帯生物多様性保全計画について一定の展望が開ける。</p> <p>マレー半島では、オランウータン、マレーバク、イルカ類、コウモリの生態に関するこれまでの研究成果をふまえて、その保全研究がさらに進み、ここでも熱帯生物多様性保全計画について一定の展望が開ける。とくにボルネオのダナムバレイでは、フラグシップ種である野生オランウータンの長期研究が発展継続し、マレー半島でではその野生復帰プログラムがさらに進むと期待できる。</p>	

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 24 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) ブラジルにおける熱帯生物多様性保全				
	(英文) Conservation of tropical biodiversity in Brazil				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授				
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				

相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Vera Maria Ferreira DA SILVA, National Institute for Amazonian Research, Professor	
参加者数	日本側参加者数	11名
	(ブラジル)側参加者数	6名
	( )側参加者数	名
26年度の 研究交流活動 計画	ブラジルでは、国立アマゾン研究所のダジルバ教授を主たる対応者として、前年度までの研究成果をふまえて、音響解析やバイオロギング、ゲノム解析などの新たな方法を導入することによって、アマゾンの野生動物保全に関する各共同研究、特にアンブレラ種であるアマゾンカワイルカ、コビトイルカ、マナティーに関する研究を継続・発展させる。主要な日本人研究者は、幸島司郎、阿形清和、湯本貴和、森阪匡通と、研究員の山本友紀子、菊池夢美、池田威秀、吉田弥生、岸田拓士、大学院生の小林宣弘、松島慶である。	
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	アマゾン熱帯生態系の野生動物保全において重要なアンブレラ種である、アマゾンカワイルカ、コビトイルカやアマゾンマナティーなどの絶滅危惧水棲哺乳類の保全研究がさらに進むほか、絶滅危惧霊長類のフタイロタマリンやナマケモノなどの森林哺乳類を対象にした研究も新たに進展すると期待される。	

整理番号	R-3	研究開始年度	平成24年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) インドにおける熱帯生物多様性保全				
	(英文) Conservation of tropical biodiversity in India				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授				
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Raman SUKUMAR, Indian Institute of Science, Professor				

参加者数	日本側参加者数	10名
	(インド)側参加者数	5名
	( )側参加者数	名
26年度の 研究交流活動 計画	<p>インドでは、インド科学大学の生態科学センターのスクマール・ラマン教授を主要な対応者として、熱帯生態系の野生動物保全研究、具体的には、ムドマライ自然保護区における絶滅危惧イヌ科動物であるドールやアジアゾウなどに関する共同研究を継続し、さらに発展させる。主要な日本人研究者は、幸島司郎、阿形清和、森阪匡通と、研究員の山本友紀子、植田彩容子、大学院生の澤栗秀太。</p>	
26年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>インドにおける熱帯生態系と野生動物保全の研究がさらに進み、対象動物や調査地も広がるのが期待できる。前年度までの、若手研究者によるドール、オオカミ、ゾウの生態・行動に関する研究成果をふまえて、音響解析やバイオロギングなどの新たな研究手法の導入によって、研究がさらに進展することが期待できる。また、今後、インドの他の地域や、他の大型動物に焦点をあてた研究も開始できると期待できる。</p>	

## 8-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「熱帯生物多様性研究国際セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “International Seminar on tropical biodiversity”
開催期間	平成26年5月18日 ~ 平成26年6月6日 (20日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、京都、京都大学野生動物研究センター
	(英文) Japan, Kyoto, WRC, Kyoto University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎・京都大学野生動物研究センター・教授
	(英文) Shiro KOHSHIMA・Wildlife Research Center of Kyoto University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

### 参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	25/ 500	
マレーシア 〈人/人日〉	3/ 60	
ブラジル 〈人/人日〉	2/ 40	
インド 〈人/人日〉	2/ 40	
合計 〈人/人日〉	32/ 640	0

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>共同研究の一環として、生物多様性研究のための国際セミナーを日本でおこなう。実習形式のセミナーである。研究技術向上を目指した日本での研修と共同研究のために招聘した相手国若手研究者と日本の若手研究者が共同して、屋久島や各相手国でのフィールドワークで集めたサンプルについて、ゲノム解析、バイオロギングデータ解析、音響・画像解析などを行った成果発表を行うとともに、ゲノム分析など先進的研究手法による優れた研究を行っている研究者による招待講演と討論によって、共同研究のレベルアップと、相手国と日本の若手研究者の育成をはかる。相手国に派遣された学生や若手研究者には帰国後、中心になって来日者の世話や日本での国際セミナーの世話をしてもらい相互交流をさらに緊密化する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>日本で開催することで、相手国研究者に日本の研究の進展のようすを理解する機会を与える。共同研究のフィールドワークで集めてきたサンプルについて、相手国と日本の若手研究者が共同してゲノム解析、バイオロギングデータ解析、音響・画像解析などの先進的研究手法を開発・習熟することによって、共同研究のレベルアップとグローバル人材の育成が期待できる。今年度はアフリカ諸国からの参加も予定され、熱帯諸国間の研究交流と協力体制がさらに強化されると期待できる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>全体の総括をする代表者の幸島司郎をリーダーとして、若手研究者で運営組織をつくる。すなわち、各国研究者（インド、ブラジル2名ずつ、マレーシア3名、計7名）と、それに対応する日本側若手研究者（計7名）が中心になって、それぞれの国情にあわせて協力した運営組織を作る。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 400,000 円 備品・消耗品費 2,000,000 円、その他 145,000 円 計 2,545,000 円</p>
	<p>(マレーシア・ブラジル・インド) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「第3回熱帯生物多様性国際ワークショップ」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “3rd International workshop on tropical biodiversity “
開催期間	平成26年9月21日 ~ 平成26年9月30日 (10日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア、アルーシャ、インパラホテル会議室
	(英文) Tanzania, Arusha, Conference Hall, Impala Hotel
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 幸島司郎、京都大学野生動物研究センター、教授
	(英文) Shiro KOHSHIMA, Wildlife Research Center of Kyoto university, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) KEYYU Julius・Tanzania Wildlife Research Institute・Director of Research

#### 参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (タンザニア)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	25/ 250
	B.	
マレーシア 〈人/人日〉	A.	2/ 20
	B.	
ブラジル 〈人/人日〉	A.	1/ 10
	B.	
インド 〈人/人日〉	A.	1/ 10
	B.	
タンザニア 〈人/人日〉	A.	
	B.	3 30
合計 〈人/人日〉	A.	29/ 290
	B.	3/ 30

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)  
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークを、本事業の相手国であるインド、マレーシア、ブラジルだけでなく、アフリカ諸国にも拡大するために、野生動物保全に関する国際ワークショップを、第三国であるタンザニアにおいて、タンザニア野生動物研究所と連携して開催する。相手国（マレーシア、ブラジル、インド）と日本、タンザニアの研究者が、一堂に会することで、相互の研究交流をさらに緊密化する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>アフリカのタンザニアでワークショップを行うことで、日本、インド、マレーシア、ブラジルの4国とタンザニアの研究者交流によって熱帯生物多様性保全に関する国際研究協力ネットワークをアフリカ諸国にも拡大できると期待される。とくに、タンザニアにおける野生動物保全研究の現場を、ブラジル、マレーシア、インドからの参加者に体験してもらうことで、交流の少なかった熱帯諸国間の野生動物保全の現状と課題に関する相互理解と研究技術に関する情報交換が進み、研究協力体制がさらに強化されると期待できる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>全体の総括をする代表者の幸島司郎をリーダーとして、また現地の受け入れ責任者であるケイユ博士を共同責任者として、熱帯生物多様性国際ワークショップ運営委員会を組織する。具体的には、日本とタンザニアで若手研究者（各国3名ずつ、計6名）が中心になっておこなう。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と概算額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 150,000 円、外国旅費 3,500,000 円 その他経費 300,000 円 外国旅費に係る消費税 280,000 円 計 4,230,000 円</p>
	<p>(マレーシア・ブラジル・インド) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>
	<p>(タンザニア) 側</p>	<p>内容 会議費</p>

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成26年度は実施しない。

## 9. 平成26年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣	日本 〈人/人日〉	マレーシア 〈人/人日〉	ブラジル 〈人/人日〉	インド 〈人/人日〉	タンザニア (第三国) 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		15/440 ( 11/225 )	11/220 ( 11/116 )	10/150 ( 6/271 )	25/250 ( 2/10 )	61/1060 ( 30/622 )
マレーシア 〈人/人日〉	3/90 ( 2/20 )		0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	2/20 ( 1/10 )	5/110 ( 3/30 )
ブラジル 〈人/人日〉	2/60 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )		0/0 ( )	1/10 ( 1/10 )	3/70 ( 1/10 )
インド 〈人/人日〉	2/60 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )		1/10 ( 1/10 )	3/70 ( 1/10 )
タンザニア (第三国) 〈人/人日〉	0/0 ( 2/40 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )		0/0 ( 2/40 )
合計 〈人/人日〉	7/210 ( 4/60 )	15/440 ( 11/225 )	11/220 ( 11/116 )	10/150 ( 6/271 )	29/290 ( 5/40 )	72/1310 ( 37/712 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。（なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。）

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

### 9-2 国内での交流計画

20 / 30 〈人/人日〉
----------------

10. 平成26年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	3,650,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	6,700,000	
	謝金	800,000	
	備品・消耗品 購入費	3,050,000	
	その他の経費	1,200,000	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	600,000	
	計	16,000,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,600,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		17,600,000	